William Blake, *Songs of Innocence* "Spring" における詩的芸術・詩的言語

William Blake, Poetic Art and Poetic Language of *Songs of Innocence* "Spring"

柏　原　郁　子*

要　旨

William Blake（1757-1827）の*Songs of Innocence* "Spring"を取り上げ、Blakeの詩的言語を分析する。対称系をなす押韻の形態、スタンザの構造、動詞、代名詞、接続詞、音素等の技巧を駆使しながら「枠」を構築し、symmetryを展開していく様を詳細に検討する。BlakeにとってのDivinity（聖なるもの）を表出するための詩的言語の構造を読み解いていく。

また*Songs of Innocence*の三つのplate（Title-page, plate22, plate23）の枠組み構造、色彩、形態の構造分析を行う。Blakeはplateにおいて幾何学的枠組みを用いることで、その「枠」に組み込まれた人体、動植物、聖なるもの、詩文等あらゆるものに圧迫を加え、形を変形さす。圧迫を加えることによって、「枠」の外へ逃れようとする反発力を生じさすことで、生来兼ね備えているエネルギーよりも遥かに大きな力を呼び起こす手段として、この技巧を生み出した。Blake にとっての詩的想像力の原点であるDivinityを表出するためには、詩的言語にとっても詩的芸術にとっても不可欠な技巧であったことを、*Songs of Innocence* "Spring"を実例として証明するものである。

Not a line is drawn without intention
as Poetry admits not a Letter that is
Insignificant so Painting admits not a
Grain of Sand or a Blade of Grass
Insignificant much less an Insignificant

＊大阪電気通信大学工学部人間科学研究センター講師

Blur or Mark.

William Blake, "A Vision of the Last Judgment".

一本の線も意図それも弁別的で個別的な意図なしには引かれていない

詩が意味のない一文字をも認めない如く

その如く絵画は意味のない

一粒の砂も又は一枚の草の葉も認めはしない

ましていわんや意味のないしみ又ははん点などは

［Combined Title-page］[1)]

まず*Songs of Innocence and of Experience*のタイトルページのplateを詳細に見ていきたい。

plate下にはfallen worldにいるAdamとEveの姿がある。二人は恥部を無花果の葉で覆ってはいるものの、半裸体である。二人は燃え盛る炎に耐えかねてか、Eveは右膝を曲げ、熱を持つ地面に出来るだけ体面が触れないよう、そして上から襲い掛かる炎を避けるべく上体を前屈させ、左腕は前方に投げ出された形になっている。顔の角度は右から向かう炎をよけるためか、左上方を向いており、目はうつろ、そして口も熱さのためか半開きの状態だ。AdamはEveの体をかばうように、Eveの伸ばしきった左足のつま先に自らの左足を被せる様に伸ばし、右足はEveの上体右側に添えるように膝を屈折させながら自らの体重を支えている。Adamの上体は腰からEve

1）William Blake, *Songs of Innocence and of Experience* The Illuminated Books Volume 2（Princeton: Princeton University Press（1998）p. 27

の体を庇うよう曲げられ、両腕は自らの頭を下から抱え込むように覆っている。二人の体が構成する形は、Eveが地面に横たわる体を一辺とし、Adamの腰を頂点とする三角形と見て取れる。この幾何学的な「枠」が意味するところは拙著[2)]を参考にされたい。Blakeの描くplateには幾何学的な「枠」が存在する。「枠」が生むエネルギーを分かりやすいように説明すると次のようになるだろう。例えば、枠のない広大な場所に例えば100人の人が散らばっているとしよう、人々は自由に走ることも出来るし、飛んだり跳ねたりは勿論両手両足を思いっきり伸ばすことも可能だ。しかし其処彼処に散らばっている100人を10畳一間に押し込むことにしたらどうだろう。殆どの人は手足を伸ばすこともかなわず、体中の関節を曲げることで折り重なる人との空間をなくし、何とか自分の身体を限られた空間の中に閉じ込めようとするはずだ。しかし各人が自分の曲げれば曲げるだけ逆に身体を伸ばしたいという反動は大きくなる。その反発する力がエネルギーとなって莫大な力を生み出すことをBlakeは熟知していた。そのエネルギーを上昇さすべく、Blakeが選んだモチーフは炎、蛇行する蔦、樹木、蛇、雲、鳥であった。そして様々なモチーフを通じて、上昇するエネルギーが上昇下降を繰り返しながら循環する永遠のエネルギーへと変容するさまをここでも論じていきたい。

AdamとEveの身体は赤、黄、濃紺、赤褐色そして金色を帯びた炎に包まれ、炎の先は左上方へ向かっている。Adamの右腕、そしてEveの左腕先も炎と同化し上昇する炎の一部となっている。plateの上部に刻まれたSONGSのS,N,Sの各文字からは下から舞い上がる炎と合流し、炎が円環する形になっている。色も単一色ではなく、黄色から赤へそして紫から暗黒色へと変化している。INNOCENCEとEXPERIENCEの文字は枠で形取られた空間の中に収まりこの文字だけが金色で塗られている。この二つの単語を結ぶandのdの文字から伸びた黄褐色の蛇行線は左横を流れる暗黒色の炎へと合流し、上昇する炎へと変化をとげる。plate右上方に描かれているのは、"bird of paradise"であろう。このモチーフは*Songs of Innocence*の全編のplateに鏤められている[3)]。下降上昇を繰り返しながら、エネルギーの上昇と循環を象徴しているのである。

AdamとEveを覆い尽くしながら舞い上がる炎とEXPERIENCEの文字の間に刻まれているのは"Shewing the Two Contrary Status of the Human Soul"（人の心情の二つの相反する状態を示す）という文字である。タイトルにあるSongs of Innocence（無垢の歌）とand of Experience（及び経験の歌）が互いに相反する状態であるのか、それとも*Songs of Innocence*の歌に相反する状態が展開されているのか、"Spring"を例にして後程詳細にみていくことにする。

この*Songs of Innocence and of Experience*全編のplateに共通する特徴は、全て枠によって縁取られていることである。このplateにもBlakeによって彩色された縁取りが見て取れる。

2）柏原郁子「William Blake, *All Religions are One* における絵画・言語芸術構造分析」『大阪電気通信大学人間科学研究』第５号 （2003年3月）

3）William Blake, *Songs of Innocence and of Experience* The Illuminated Books Volume 2（Princeton: Princeton University Press（1998）p. 35, 43, 55, 71, 79

下辺に緑で彩色されたのはivy（蔦）である。蔦は左右の枠に沿いながら複数の輪状となり上辺の中央まで這っている。上辺中央にはplateの下部から上昇してきた炎が描かれている。縁取りに描かれた線描は一本たりとも直線では描かれていない。これは先程述べたとおり、蛇行する蔦がエネルギーを上昇さすモチーフとしてBlakeが選んだからである。縁取りの彩色に使っている緑色はEveが横たわる大地の色であり、うっすらとしたピンクは "bird of paradise" が舞う空の色であり、黄色は熱く熱した炎の色であり、下辺にある灰色はAdamとEveの肉体に彩色された色であるのだ。つまりこの「枠」が存在するからこそ、身体の屈折、炎の上昇、鳥の飛翔が起こり、相反する "contrary" の状況が生じ、エネルギーの上昇が始まる。そしてこのplateに施された縁取りの色と蛇行する蔦は、plateそのものと呼応しつつ、拮抗したエネルギーさえ感じ取れる。この相反する "contrary" をテーマとして各plateにおいてどのように表現されているのか詳細に見ていくことにする。

［*Songs of Innocence*: Spring］[4)]

このplate22は上下の２部のパートに分けることによって、plateの空間が狭まり、空間が限定されることにより圧縮感が強まり、一種の静寂さえ感じられる。まず上部のplateには何年もの樹齢を持つであろう大木の根元に腰を下ろし、幼子を自らの膝に立たせ右手で幼子の右腿を、左手で幼子の腹部を支えている女性が描かれている。この構図はTitianのMadonnasに拠るものであるというBindmanの指摘がある[5)]。この指摘は詩文に見られる聖書との関連からも正しいことが分かるが、この論証は詩の分析の項に譲りたい。

４）William Blake, *Songs of Innocence and of Experience* The Illuminated Books Volume 2（Princeton: PrincetonUniversity Press, 1998）p.69

５）David Bindman, *Blake as an Artist*（Oxford: Oxford University Press, 1977）p.60

女性が身にまとう衣服の色はTitleページにある炎の色の色調と同じであるとともに、plate 18 "The Divine Image"の中で描かれている炎とも同じである。炎が様々な形に変容するように、BlakeにとってTitleページにある"two contrary Status"を表現する有効な手段であったのだと思われる。この女性の構図が衣服の裾の広がりを下辺とし、頭を頂点とする三角形を形作ることによって、静的な状況の中に、炎を喚起する色を用いることによって上昇するエネルギーを、そして「枠」を用いることによって凝縮され、そして同時に「枠」から解放されようと反発するエネルギーを感じさせるのである。ここで注目すべきは、彼女の左手の描写である。一本一本の指を黒くはっきりと描き、その重量感は彼女の肢体のバランスから考えると異常に大きい。左手の色もTitleページにおいてAdamとEveの肢体に使用された色であることから、original sin（原罪）を負うAdamを髣髴させる色であり、彼女の手が支える幼子の肢体が純粋無垢を象徴する白色であることを考慮に入れれば、全く異なるものが対称されていることになる。この異なるものを突き合わす技巧も"contrary"を生んでいることが分かる。手の位置も女性の肢体が形作る三角形の一辺の丁度境界部分に描かれており、その「枠」から逃れようと両腕を右上方に伸ばし、女性の膝から今にも離れて動き出そうとするものの間にも拮抗するエネルギーが見て取れる。そして境界に描かれることが左手をデフォルメさす要因となっていることがわかるだろう。「枠」の境界ほど反対側に向かおうとする反発力が強まるからだ。このデフォルメと同様な効果を感じさすのは、女性が腰を下ろしている大木である。この女性像が無ければ遠近法を用いた構図が見て取れるのだが、この女性の肢体はこの大木の至近距離にあるため、この大木の占めるplateの中の割合と、女性像の占める割合が実に不均衡に写ってしまう結果となっている。この空間に占める不均衡な女性像の比率は、女性が腰を下ろす大地を下辺とし、左手から右上方に伸びる幹を左辺、そしてたわわに茂る葉の重さでしんなりと右手に垂れ下がる幹の延長線を右辺とする三角形の「枠」が見て取れるのである。つまり「枠」が「枠」を取り囲む幾何学的な構造を作り上げることによって、従来の遠近法を無視した独特のフォームを生み出す結果となっている。

plateの左にある幹の後方が白んでいるのは、夜明けを暗示している。その光が中央遠方に広がる山々に届き、plate右にあるうっすらと残る夕闇の赤色を白色に染めつつある。この配色はTitle pageにある白地に金色で描かれた"INNOCENCE"を赤と青褐色の炎が囲むのと同様である。つまりここでは、original sin（原罪）を負うこの地上世界と原罪を象徴する赤の衣装を身にまとう女性から、再生を象徴する白色で描かれた幼子と再生されつつあるこの地上との対称が描かれているとみなすことが出来る。

plate右側に描かれているlamb達が金色で描かれているのも、先のTitle pageの"INNOCENCE"が金色で描かれたのと同様の意図が見てとれる。事実"lamb"は無垢、無邪気などの象徴としてみなされており、二分されているplateの下半分に記されているタイトル"Spring"も金色に彩色されていることから、Blakeが象徴しようとするものは、Blakeの選ぶ色彩に反映されていることが分かる。

それでは下半分のplateを解読していきたい。

上半分に配色されている青褐色がplate左下の角を染めているが、plate中央から周辺に広がっている白色によって、中央に行くほど薄くなっている。左下の角の対角には"Spring"と同色である金色に染められ、春の訪れが再生を促しているかのようである。その金色に染められた場所に、金色の麦の穂が描かれており、"Spring"の"g"の文字右肩から蛇行しながら伸びる麦には"Flute"（笛）をもつ天使が腰かけている。詩文にある 1."Sound the Flute!"という言葉によって伸びやかに広がる笛の音と呼応するこの麦は、天使の座る位置より蛇行しながらplateにある詩文 8.Merrilyの文字の横まで伸びている。それとは対照的に左下から広がった青褐色にまで伸ばされた麦の葉の上には体重を支えるため左腕だけを麦の葉に置き、不安定な体勢で漂う天使が描かれている。背にある翼の広がりは、Title pageにあるplateに描かれているbird of paradiseと酷似しており、上空へと飛翔するエネルギーを感じさせ、天使のいる場所も青褐色と白色の境界であることから、上部plateに描かれデフォルメされた女性の左手と同様、異なる色の「枠」に位置することによる圧迫から不安定な肢体を保たざるを得ないという解釈が成り立つ。

左手にはTitle pageの枠に描かれていた蔦が下方から詩文に沿って蛇行しながら"Spring"の"S"という文字まで上昇している。下方にある蔦は褐色を帯びた緑色をしているが、途中に彩色されている淡い赤色にも染まらずに、上方になればなるほど、右上方に描かれた金色の麦の穂と同様、金色へと変化していく。つまり下方から上方にかけての色の変化、蛇行する麦の形、上昇する蔦によって原罪から再生へのプロセスが示され、天使が吹く笛の音によって更なる動的エネルギーが加わる結果となっている。

このplateの枠には、下辺から左右の枠に沿って、淡い緑色の麦が描かれている。この穂はまだ穂の重みで穂先が撓っていないことから、実りの時期を迎えていないことが分かる。またこのことは麦が実りを迎えるまで成長を続けることを意味しており、この麦が枠に沿って成長するであろうエネルギーを感じさせる。麦の穂が描かれている上部に僅かながら空白があるのは、まだ成長過程にあり、その先にある蔦まで伸びることを暗示しているのであろう。そしてこの成長を続ける麦のエネルギーを受けてか、上半分のplateを囲む枠には蛇行する蔦が描かれ、plateの上部には蔦が恰もメビウスの帯のように捻られており、終わりのないエネルギーの循環が起きているといえよう。

では次に詩文の技巧を分析していくことにする。

［*Songs of Innocence*, "Spring"］[6)]

1. Sound the Flute!　/sáʊnd/ /ðə/ /flúːt/
2. Now it's mute.　/náʊ/ /ɪts/ /mjúːt/

6）William Blake, *Songs of Innocence and of Experience* The Illuminated Books Volume 2（Princeton: Princeton University Press（1998）p. 68

3. Birds delight /bə́:dz/ /dıláıt/
4. Day and Night, /déı/ /ənd/ /náıt/
5. Nightingale /náıtəngéıl/
7. Lark in Sky /lá:k/ /ín/ /skáı/
8. Merrily /mérıli/
9. Merrily Merrily to welcome in the Year /mérıli/ /mérıli/ /tə/ /wélkəm/ /ín/ /ðə/ /jíə/
10. Little Boy /lítl/ /bɔ́i/
11. Full of joy, /fʊl/ /əv/ /dʒɔ́i/
12. Little Girl /lítl/ /gə́:l/
13. Sweet and small, /swí:t/ /ənd/ /smɔ́:l/
14. Cock does crow /kák/ /dəz/ /króʊ/
15. So do you. /sóʊ/ /dú:/ /jú:/
16. Merry voice /méri/ /vɔ́ıs/
17. Infant noise /ínfənt/ /nɔ́ız/
18. Merrily Merrily to welcome in the Year /mérıli/ /mérlli/ /tə/ /wélkəm/ /ín/ /ðə/ /jíə/
19. Little Lamb /lítl/ /lǽm/
20. Here I am. /híə/ /aı/ /ǽm/
21. Come and lick /kʌ́m/ /ənd/ /lík/
22. My white neck. /maı/ /hwáıt/ /nék/
23. Let me pull /lét/ /mi:/ /púl/
24. Your soft Wool. /jʊ́ə/ /sáft / /wʊ́l/
25. Let me kiss /lét/ /mi:/ /kís/
26. Your soft face /jʊ́ə/ /sáft/ /féıs/
27. Merrily Merrily we welcome in the Year /mérıli/ /mérıli/ /wi/ /wélkəm/ /ín/ /ðə/ /jíə/

ここに掲げた詩句の綴字法と句読法は、*Songs of Innocence and of Experience*（1794年）においてWilliam Blakeが刻した本文に厳密に従っているWilliam Blake *Songs of Innocence and of Experience* The Illuminated Books Volume 2（Princeton: Princeton University Press（1998)に拠るものである。

この詩の三つの九行詩節（スタンザ）は、四つの対連（Couplets）と一つの節（Clause）により成り立っている。各々の二行連句をなす二行は押韻によって結ばれておりながら、形態素は

変化に富んでいる。第一連：$_{1.}$Flute /flú:t/ ： $_{2.}$mute /mjú:t/ のように/t/の韻を踏んでいるが、第一行は名詞である"Flute"であるのに対し、第二行は形容詞である"mute"を使っている。これは第一行でタイトル（Spring /spríŋ/）に使われた同じ音素/s/から始まる動詞"Sound"を用いることで、自然界の生命が活気付く春"Spring"の躍動感を齎す効果があるのだが、次行で韻を踏む品詞を名詞ではなく形容詞を敢えて選ぶことで、"mute"（沈黙した）という状態の変化を如実に表すことになる。この詩の三つからなるスタンザの中で文頭に動詞"Sound"を用いているものは他に無く、動的な動きと静的状態を形態素の使い分けによって実現している。またこの詩節のなかで、唯一用いられているピリオドが第二行目に置かれているため、第一行目 $_{1.}$Fluteの直後に置かれたexclamation mark（感嘆符）によって一層音の広がりを感じさす効果を、一挙に静寂の世界へと導く結果となっている。音の響きを意識してか、この第一スタンザで脚韻としてprolonged sound（長音）を用いているのはこの第一連だけである。

第二連：$_{3.}$delight /dıláıt/ ： $_{4.}$Night /náıt/では第一連に引き続き音素/t/の使用が見られるが、第一連で用いた"Flute"（noun）- "mute"（adjective）の組み合わせをもはや使わず、"$_{3.}$delight"（verb）- "$_{4.}$Night"（noun）の新たな形態素の組み合わせを提示することで、一旦 "$_{2.}$mute" によって静的状況に引き入れた後の新たに動的な躍動感を齎す。以上四行の押韻語は同一の音素/t/を用いてはいるものの、その母音に先行する音素については統一性を欠いている：$_{1.}$Flu-te ： $_{2.}$mu-te, $_{3.}$deligh-t ： $_{4.}$Nigh-t。これは単調な音素の繰り返しに陥らない工夫であるとともに、例えば三行目の "$_{3.}$delight"の母音に先行する音素/d/が、実は次行 "$_{4.}$Day"に引き継がれ、四行目の "$_{4.}$Night"の母音に先行する音素/n/が次行の "$_{5.}$Nightingale"に引き継がれるように詩全体に音の連鎖が起こっていることが分かる。

接続詞"and"で結ばれている二語も各スタンザによって多様である。四行目にある "$_{4.}$and"が結んでいる語句は名詞語句、"$_{4.}$Day"と "$_{4.}$Night"であるが、つぎのスタンザでは十一行目にある形容詞語句"$_{11.}$Sweet"と "$_{11.}$small"を結んでおり、最後のスタンザでは二一行目にある動詞"$_{21.}$Come"と "$_{21.}$lick"を結び付けており、同じ接続詞"and"でありながら各詩節で異種の語を連結させることにより動的な効果を生んでいる。またその配置にしても第一及び第二スタンザでは、第二対連後半に "$_{4.}$Day and Night"、"$_{13.}$Sweet and small"を置き、第三スタンザでは、第二連前半に "$_{21.}$Come and lick"を置くことで構文の変化を起こすことになっているのである。

次に第三連と第四連を分析していく。

第一連、第二連と同様 $_{5.}$Nightingale /náıtəngéıl/: $_{6.}$dale /déıl/, $_{7.}$sky /skáı/: $_{8.}$Merrily /mérıli/というccddのrhyme scheme（脚韻様式）を踏んでいる。五行目はこのスタンザで初めて一単語で構成されているが、Nightingaleは/*Night*/*in*/*gale*/と三音節にわけられ、次行では音節を行全体で三音節になるよう構成し、この詩節で始めて使われる前置詞の $_{6.}$in は $_{5.}$Nightingaleの二音節目の音素を用いている。次の対連（７行－８行）では前の対連（５行－６行）とは逆の構成をとっている。つまり六行目の三単語の構成を七行目の $_{7.}$Lark in Skyが引き継ぎ、八行目

$_{8.}$Merrilyが１単語であるのは、五行目の $_{5.}$Nightingaleと呼応しており、第三連と第四連が内側の対連と外側の対連が局部的対称sectional symmetryを成している。

このスタンザの最終行は、前に見られる各対連の構成要素とは異なる。まず、連をなしていないという点で異質であるが、音声的組み合わせ、そして押韻的組み合わせで各対連とsymmetry（対称）をなしている。第九行の冒頭 $_{9.}$Merrilyは前行 $_{8.}$Merrilyを繰り返すことで音韻の流れが続くとともに、第四連と対称する形も生み出す。また第三連、第四連で使用した前置詞 $_{6.}$in, $_{7.}$inと同じ前置詞を用いることで、一行目から八行目まで三単語以上の語の選択が無いのにもかかわらず、この九行目では初めて七単語使用し独立した感をあたえるが、実は既出の対連と密接に呼応しているのである。またここで使用されている音素も今までの対連で使用されている音素との連関がみられる。まず/m/は $_{2.}$muteに用いられているが、笛の音の静まりとともに、/m/の使用が次行から見られなくなる。$_{1.}$Fluteの音が一旦止むものの、四行目には $_{2.}$muteに引き続きprolonged sound（長音）を含む $_{3.}$Birdsを、そして $_{1.}$Fluteの音素のひとつである/l/を含む $_{5.}$Nightingale, $_{7.}$Larkを置くことで、音の連鎖が生じていることがわかる。そして個々の名詞句に呼応して音の余韻を響かせながら、最終行において $_{2.}$muteとは対照的な意味を持つ副詞 $_{9.}$Merrily Merrily /m/を語頭に使用することで静的状況から動的状況へと移行する様子を際立たすことになっている。この第一スタンザにある四つの動詞、$_{1.}$Sound, $_{2.}$is, $_{3.}$delight, $_{9.}$welcomeのうち後半の二つの動詞はどちらも二音節の動詞であり、音素/l/を共有しながらもその母音に先行する音素については一致していない。が、九行目にwelcomeを置くことで、三行目のdelightとの間に呼応が起き、はじめのスタンザの間でエネルギーの循環が起こるのだ。Invention（発想）と Identity（同一性）とは双方ともに"are Objects of Intuition"（直感の対象である）とBlakeは述べているが、この語の詩的網状態を理解する手がかりになりそうだ。$_{1.}$Fluteによって起こるリズムがある特定の音素によって詩全体に刻まれていることも偶然ではない。タイトルにあるSpring /spríŋ/にある/ɪ/は、$_{2.}$it's, $_{3.}$delight, $_{4.}$Night, $_{5.}$Nightingale, $_{6.}$In, $_{7.}$in, $_{8.}$Merrily, $_{9.}$Merrily, $_{9.}$Merrily, $_{9.}$in と第一スタンザにある二六語のうち十語に音素/i/を含む語が使われており、全体として楽曲的なリズムさえ生んでいる。そしてこのリズムの存在と最後のリフレインはNew Year Songもしくは Christmas Songsとの類似も指摘できるが、今まで詳細に見てきたように、$_{1.}$Sound / $_{2.}$mute, $_{4.}$Day / $_{4.}$Night, $_{5.}$Nightingale / $_{7.}$Lark の二つの相対するものの対照によって生じるイメージの衝突が起こることで、$_{9.}$Year（新たなる時）つまり再生へとつながることを暗示している。Blakeが $_{9.}$Yearを小文字のy を用いずに、大文字のYをあえて使用していることからも暦上の新年を意味するわけではないことが分かる。

では第二スタンザを分析していきたい。

前スタンザで楽曲的なリズムを生じさせていた音の連鎖がこのスタンザでも引き続き起こっている。$_{8.}$Merrily /mérɪli/に含まれる/li/が第一連の冒頭に置かれ、/l/の音で閉じ、次の行では第一スタンザで $_{1.}$Soundと対照的に用いられた $_{1.}$Fluteの/f/から始まり、前行と同様/l/の音で閉じ

る。第一連のrhyme schemeは 10. Boy /bɔ́ɪ/, 11. joy /dʒɔ́ɪ/という前スタンザ中では用いられなかった二重母音であり、母音に先行する音素は/b/, /dʒ/と異なっている。この二つの音素の内/b/は 3. Birds で用いられてはいるが、/dʒ/の音素はスタンザでは用いられておらず、前スタンザの特徴であった静的な状態と動的な状態の対称という形態を展開するのではなく、新たな音素を体系的に加えていくことにより、エネルギーの拡張が起こっているようだ。このことはplateからも判断できる。plate22においては上下枠によって区切られることで、上下の枠が出来上がり、その枠内で、色調、麦の描く曲線、身体のデフォルメが起こっているが、plate23は上下に分割されることも無く、plate23下部から生える麦はplate最上部まで蛇行しながら伸び、plate全体でエネルギーの循環が行われている。

次の第二連では第一連と同様 8. Merrily/mérɪli/に含まれる/li/を冒頭に置き、/l/の音で閉じ、次行においても押韻として（13. small）この/l/の音を用いている。この/l/の音をもつ 12. Fullは前行の冒頭の語句として用いておりながら、次行では 13. Sweet and smallのように文末に用いることで、丁度対称になるよう配置されているのも偶然ではあるまい。12. Girl /gə́:l/の長音が次行 13. Sweet and small, /swí:t/ /smɔ́:l/でも繰り返され、この音素/s/はSpring, 1. Soundの音素つまり動的な状態を喚起さす音素を引き継いでいる。つまりこのスタンザで動的な意味合いを持っていた 1. Sound, Flute, 3. Birds, delight, 4. Day, 7. Lark が次々と音韻を変えながら登場する。

第三連では第二スタンザで四つ使用されるverb（動詞）の内三個使われる。敢えて動詞が三個並ぶ理由は詩文から明らかになる。この連だけが、初めて押韻を踏んでいない。文末を見ると 14. crow /króʊ/- 15. you /jú:/と明らかに違う。それを補うかのように十四行目では、14. Cock does crow /kɑ́k/ /dəz/ /króʊ/と音素/k/を使用している。この 14. Cockは新たな夜明けを告げる使者であり、新しい世界の誕生を促進するかのように動詞が多用されているのである。そして新たな世界を象徴するように用いられた動詞が次行 15. doでも使われている。この文頭の 15. So /sóʊ/が前スタンザのSpring, 1. Sound と同様動的なイメージが包容されていることは間違いない。14. crowと韻を踏まずに選ばれた 15. youこそが、実は、第三スタンザで言及されている（ 20. Here I am）一人称で言い表されているものである。つまり"Here I am"という表現がBibleにおいてはdivinity（神）の出現を意味していることから分かるように[7]、第二スタンザにおいて初めてDivinityの存在が提示されていることになる。多用される動詞、そして音韻を踏まない連もこの特別な存在（Divinity）の提示には必要な手段であった。不規則な押韻は次の連にも波及している。 16. voice /vɔ́ɪs/ / 17. noise /nɔ́ɪz/がこの連の最終韻として選ばれているが、母音に先行する音素も後続する音素も異なるものを組合すことによって、神聖なるdivinityの属性を際立たせることを意図していたのだ。中央に共通の母音を置く構造は、plate23にある幼子の配置にも共通性が見出せる。押韻を踏まず前後に異種の子音を使い、共通の母音を中央に用いたのと同様、plateにある幼子

7）Genesis 22.1, 11; 31.11; Exodus 3.4

もinnocence（無垢）の象徴であるlambに挟まれて中央に座っている。両者ともある「枠」を用いることで、音韻、空間とも凝縮され、それによってエネルギーが引き起こされていると解釈することが可能である。

第一スタンザにおいては笛の音（1.Flute)、鳥のさえずり（3.Birds, 5.Nightingale, 7.Lark）だけが聴覚に訴える音の響きであったのが、次のスタンザになって、神聖なるdivinityの16.voice（声）に変化し、次行では具体的に17.Infant noiseと幼子のあげる声に変化することで、このplate23に描かれている幼子が、Bindmanの指摘にあるようにキリストであることが頷ける。そして第一スタンザ最終行の9.Merrily Merrily to welcome in the Year と同じく18.Merrily Merrily to welcome in the Yearを第二スタンザ最終行にリフレインすることで、スタンザ間の循環が起きると共に、16.voiceの前に用いられたadjective（形容詞）16.Merryがdivinityを喚起するものであることと、先に述べた大文字で始まる9.Yearが再生を示すことからも、このリフレインは一種の「枠」の機能を持ち、新たなものを生み出すエネルギーを起こさせているのだろう。

では第三スタンザの分析に移りたい。

第一スタンザ、そして第二スタンザで用いられた1.Flute, 3.delight, 6.dale, 7.Lark, 8.Merrily, 9.Merrily, 9.welcome, 10.Little, 11.Full, 12.Little, 12.Girl, 13.small, 18.Merrily, 18.welcomeに含まれる/l/の音素から始まる。そしてplateの中にも描かれている19.lambが先の述べたように、innocence（無垢）の象徴であったように/l/の音素もdivinity（神聖）を帯びる結果となる。次行20.Here I amはBibleではdivinityの出現を意味することから、このスタンザにおいて神聖なるものの出現を表出する言語の技巧が巧みに繰り広げられることになる。

まず19.Lambと押韻を踏んでいる次行の20.amだが、前のスタンザでは17.voice / 18.noiseで中央の母音を中心に異なる子音で挟み込む形態をとっていたが、この19.Lambの語頭と語末の異種の子音を取り除くと20.amが現れる。plate23にもあるように、中央に聖なる幼子が座り、そのまわりをlambが囲んでいることと無関係ではあるまい。

そして第一、第二スタンザでは四つの動詞〔1.Sound, 2.is, 3.delight, 4.welcome（第一スタンザ)、14.does, 14.crow, 15.do, 18.welcome（第二スタンザ)〕の使用が見られた。しかし最終スタンザ第一連にてdivinityの出現があってからは、20.am, 21.Come, 21.lick, 23.Let , 23.pull, 25.Let, 25.kiss, 27.welcomeと二倍の八個の動詞を用いている。つまり聖なるエネルギーが加速されるさまを動詞の多用により表していることになる。各スタンザに接続詞andが使用されていることは先に述べたが、第一スタンザでは名詞and名詞、第二スタンザでは形容詞and形容詞、そして第三スタンザでは動詞and動詞（20.Come and lick）と変化する理由がここで説明できる。20.lickも最終スタンザ冒頭にある19.Littleと同じ音素/l/を使用し、押韻を踏んでいる第二対連20.lick / 21.neckの音素/k/も、第二スタンザ第三対連14.Cock does crow /kɑ́k/ /dəz/ /króʊ/、新たな夜明けつまり再生を表出する際に用いられた音素と同様である。このスタンザで初めて色を表す語22.

whiteが用いられている。plate22で解説したとおり、上部plateの大木の左手の空が白んできているのは夜明けを意味するものであり、その白さが右に広がる山脈にも広がっているのは、新たなる新世界が生まれようとしている訳だった。ここで、22.whiteを用いているのは、plate22の白色をした幼子も、plate 23に描かれている白色をした生まれたばかりの幼いlambも,中央に座っている白色の幼子も皆divinityを帯びていることの証明でもある。

第三、四対連における第一行目は共に 23.Let me pull, 25.Let me kissと文法構文上の類似が見られる。先ほど述べたように 20.Here I amがdivinityの表れを意味することを考えれば、母音を異種な子音によって挟み込む技法（16-17)、子音を結合さすことによって異なるものを作り上げる技巧（19-20）と共通する技巧がここで指摘できるだろう。つまり23及び25行目にあるmeはdivinityを表しているので、これを動詞語句 23.Letとpull 25.Letとkissという動的な「枠」で囲むことによって、自然界（ 6.Birds, 4.Day, 4.Night, 5.Nightingale, 7.Lark, 7.Sky）の変化を甘んじて享受する立場ではなく、自らが動的な力を持つ存在へと変化していく様を表現する技巧を用いているのである。ここでは文の構造だけではなく、23.Let /lét/とpull /pʊ́l/で用いられている音素/l/も「枠」として機能していることが分かる。24.Your soft Wool. /jʊ́ə/ /sɑ́ft/ /wʊ́l/, 26.Your soft face /jʊ́ə/ /sɑ́ft/ /féis/も文法上の構文が類似していることと、第三対連と第四対連の最初の二単語を共有することで、両者間に強力な引力さえ引き起こされている。第四対連の 25.kiss, 26.soft, 26.faceの/k/, /s/, /f/, いずれの音素も第一、第二スタンザで動的な動きを象徴する際に用いられた音素であり、Blakeにとっての音素の選択は意味のあることであったことが頷ける。

最終行のリフレインだけが、不定詞toの代わりに代名詞weに変化していることに気づくであろう。聖的な存在を示唆する語が、15.youという代名詞を使用して以来、この第三スタンザになってからは、20.I - 22.My - 25.me - 24.Your - 25.me - 26.Your - 27.We と計七つの代名詞の使用が認められる。最終行で初めてWeが使われたのは、divinityの出現により、聖なる存在が自然界の万物を含め、全てのものを浄化するエネルギーへと変化する循環が始まったからではないだろうか。

この様子がplate23でどのように展開されているのか、詳細に分析していきたい。

［*Songs of Innocence*: Spring］[8)]

plate22との違いとして一見して分かるのは、上下に二分割されていない点である。つまり上下によってより狭い「枠」によって区切られていないため、エネルギーの凝縮というのは弱まっていることも考えられる。しかし、実は先に述べたように「枠」によって生じる反発力の代わりに、動的な動きを生じさせているのは詩文にある動詞である。plate22では四つしかない動詞ではあるが、このplate23では、三倍の十二個の動詞を用いている。では、詩文によって強力に引き起こされた動的エネルギーがplateにおいてどのように反映されているのか見ていくことにする。

まずplate下部には蛇行する川が描かれている。川は常に流れ、また聖なる水として罪の浄化をも施す力をも持つことから、この川の存在がこのplateにいる幼子が単なる子供としてではなく、divinityを備える存在であることを暗示している。実際色彩を見ても、plate22において使われた夜明けを示す白色よりも、plate23においての川の色彩のほうがより一層反射する白色を用いている。

plate下部中央には中洲があり、その上に幼子、と三匹のlambが描かれている。前plateでは母の膝の上に立ち、デフォルメされた左手を持つ母の手から逃れるすべも無く、徒に両腕を宙に伸ばすしか術の無かった幼子が、母の庇護を離れ、自らの力で子羊と戯れる。plate22では殆ど読み取ることさえ不可能であった顔の表情も見て取れる。しっかりと子羊を見据え、plate22では宙に伸ばしていた両腕をここでは、しっかりと子羊の両肩に下ろしている。この構図こそ第三

8）William Blake, *Songs of Innocence and of Experience* The Illuminated Books Volume 2 (Princeton: Princeton University Press, 1998)　p. 71

スタンザにある 19.Little Lamb 20.Here I amを描いた形になっているのだ。先に説明した神聖さ（divinity）は、この幼子の肢体の色によっても明確である。つまり聖なる水が幼子の身体に反射し、川と殆ど同じ澄み切った白色で描かれているのだ。また詩文で解説した、異なるものとの結合は、幼子の両脇に膝を曲げて大地に座る二匹のlambによっても示されている。

このplateは先のplateのように二分されているわけではないことは明らかであるが、この幼子とlambの配置から「枠」を形成していることが指摘できる。幼子の両脇でゆったりと腰を下ろす左右二匹のlambと、前面に腰を下ろしている幼子と子羊を取り囲む四角形が形成され、そして前面に位置する大地に座る子羊と幼子の地面につけた右大腿部と左足を下辺とし、幼子の頭を頂点とする三角形の構図が読み取れる。この「枠」はplate22において女性と幼子を取り囲む三角形を引き継ぐものとも思われる。というのもplate22の「枠」の存在のために女性の左手にデフォルメが施される結果となっているが、このplate23の幼子もこの三角形の「枠」により、実に不安定な肢体を強いられることになっている。肢体はデフォルメされてはいないが、身体を横むけに寝転ぶように右膝を折り曲げ、右大腿部を地面につけてはいるものの、上半身を右向けに捻り、倒れかけの上半身を支えるために左横に体を休めている子羊の両肩にもたれかかるような状態となっている。この姿勢は第三スタンザの 25.Let me kiss 26.Your soft faceを想起さすものであることを言い添えておこう。幼子の両手に圧迫感は無く軽く触れているように描かれているので、この状態を維持するのにはかなりのエネルギーが必要であろう。この無理な姿勢は幼子と子羊を取り巻く「枠」による捻れとも解釈できる。この無理な姿勢から開放されようとする反発するエネルギーが下部から上部へと上昇するエネルギーに変化している様子を次に見ていくことにする。

蛇行する川の表面には曲線を描きながら流れる金色の帯が描かれており、plate左辺を蛇行しながら上昇している。右辺は金色に染まっていることから、夜明けを示していることがわかる。金色はplateの中央近くまで広がり、右下にたわわに実る麦の穂も金色に染まっている。中央は金色から白色へと変化をとげているが、下方から右上方へとくるくると円を描きながら、19.Little Lambまで途切れずに描かれており、丁度 23.Let me pull付近に描かれた右手にある麦の葉に金色で描かれた天使が腰を下ろしている。まだ実りきってはいないのか、麦の穂は緑色をしているが、重みで左下にむけて撓っており、天使もバランスが崩れたときのためにか、翼を高く上げいつでも飛び立てるよう準備しているようだ。この天使の周辺も際立って白く描かれており、Title Pageのplateにあるinnocenceを囲む色と同色であることから、色彩の変化が天使の無垢な存在を際立たせる。そして再生の時を表していた 15.Yearの真横から新たな麦が丁度ループを描きながら一回転しており、その先には金色の麦の穂が描かれている。麦の描くループの中に金色の描線で描かれた天使が高らかに手を上空に向けて差し上げている。16.Merry voiceと呼応しているのか、聖なる存在の天使の声が曲線を描く麦の葉にこだまし、その響きが「枠」を超えて響き渡る。

左辺付近にTitle pageの炎の彩色に使われた青褐色が施されているが、右下方から上昇する麦の葉を境に朝日を浴びて淡いピンク色に変化し、そして詩文そのものも黄金色で記されている。第二、第三スタンザで解釈したとおり、ここでは前plate22では言及されなかったdivinityが様々に変容しながら、詩文に現れていたことからも、この黄金色は無作為に選ばれたのではないことが明らかである。

以上の分析から「枠」の構造を詩文においても巧みに利用しながら、対連のなかに対称系を構築する音韻変化、文型構造、名詞、形容詞、動詞、接続詞、代名詞の技法が明らかになった。その技法は全てBlakeが詩文上でDivinityを体現することを望んでいたからではないだろうか。ここで取り上げた三つのplateを見ても、「枠」を作りながら蛇行、屈折を繰り返す肢体、植物、文字、蔦、麦も全て絶え間ない聖なるエネルギーを生じさせる手段であったのだ。